様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　７ 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：２６４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2024
課題番号：２０Ｋ１０８９１

研究課題名（和文）学童期にある発達障害児の家族の家族ストレングスを促進するケアプログラムの開発

研究課題名（英文）Development of a Care Program to Promote Family Strengths in Families of School-Aged Children with Developmental Disabilities

研究代表者
源田　美香（GENDA, MIKA）

高知県立大学・看護学部・助教

研究者番号：６０８４９８２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、学童期にある発達障がい児とその家族の家族ストレングスを促進するケアプログラムの開発をすることを目的とする。研究目標１「学童期にある発達障がいをもつ子どもその家族ストレングスを明らかにする」では、家族ストレングスとして5つのカテゴリーと20のサブカテゴリーが抽出された。研究目標２「学童期の発達障がいをもつ子どもとその家族のストレングスを高める看護援助行動を明らかにする」では、6つのカテゴリーと26のサブカテゴリーが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
学童期にある発達障がいをもつ子どもとその家族が家族ストレングスを獲得することは、家族員の情緒的安定や親離れ子離れを進めつつ家族のつながりを強化していくこと、子どもの特性に応じて地域との交流を図り、家族が家族らしく成長していくことにつながると考える。しかしながら、発達障がいをもつ子どもとその家族の家族ストレングスは明らかにされていない。家族ストレングスが明らかになることで、学童期にある発達障がいをもつ子どもとその家族の体験の理解、家族がもつ力を活用したケアの考案に貢献できると考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to develop a care program that promotes family strengths for school-age children with developmental disabilities and their families. For research objective 1, which was to clarify the strengths of school-age children with developmental disabilities and their families, 5 categories and 20 subcategories of family strengths were extracted. For research objective 2, which was to clarify nursing support actions that increase the strengths of school-age children with developmental disabilities and their families, 6 categories and 26 subcategories were identified.

研究分野：看護学

キーワード：家族ストレングス　発達障がい

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

発達障害をもつ人はおよそ 481,000 人とされ、複数の障害が併存している。発達障害は、発達の過程で明らかになる行動やコミュニケーション、社会活動上の障害であり、複数の障害が併存しており、障害が常時、顕在化しているわけではなく、人的、物理的環境要因により障害特性の濃淡が出るという特徴をもつ。そのため、障害特性が理解されず努力不足やわがままと誤解されて不適切な対応が続くと二次障害が深刻化する。学童期にある発達障害児の家族は、子どもの障害による特異行動に対して、子どもの問題探しに囚われるが、多くの家族が、適切な解決策を見出すことができず、その結果、親としての自信を見失う体験を繰り返している。さらに、夫婦間での子どもの障害に対する認識のずれ、きょうだい児への親からの過剰な役割期待によって、家族内の不調和が生じる場合もある。多くの家族は自身の社会活動を制限して、子どもの特異行動を解決しようと試みるが、社会活動の制限によるストレスの蓄積が子どもの二次障害、親の抑うつ、きょうだい児の情緒への影響など、家族全体の悪循環を招き、家族員の精神的不適応を引き起こす可能性があることが指摘されている。このような家族に対して、医療者もまた、子どもの特異行動の改善に向けた問題解決支援に偏った支援によって、家族がさらに特異行動を問題として捉えることを強化してしまうという側面があり課題となっている。一方で、子どもの特性の理解を深め、周囲の人々からも発達障害の理解を得ながら地域との交流を続けて、家族らしくいることを大切にするという家族の強みをもつ家族もいる。本研究では、このように、家族らしさを大切にしつつ家族の中や地域と交流を図り、体験を通して考え方を調整しつつ獲得している家族の力を「家族ストレングス」と捉える。家族ストレングスを獲得することは、家族員の情緒的安定や家族のつながりの強化、子どもの特性に応じて地域との交流を図りながら家族らしく成長していくことにつながると考える。しかしながら、発達障害をもつ子どもとその家族の家族ストレングスはいまだ明らかにされていない。したがって、学童期にある発達障害をもつ子どもとその家族の体験への理解を深め、家族ストレングスを明らかにして、家族ストレングスの獲得を促すケアを考案することが重要であると考える。

２．研究の目的

本研究は、学童期にある発達障害児とその家族の家族ストレングスを促進するケアプログラムの開発をすることを目的とする。この目的を達成するために以下の目標４つを設定したが、現在までに取り組んだのは研究目標１，２である。

研究目標１：学童期にある発達障害をもつ子どもとその家族の家族ストレングスを明らかにする

研究目標２：学童期の発達障害をもつ子どもとその家族のストレングスを高める看護援助行動を明らかにする。

研究目標３：学童期にある発達障害児の家族の家族ストレングスを促進するケアプログラム案を作成する

研究目標４：学童期にある発達障害児の家族の家族ストレングスを促進するケアプログラム案の洗練化する

３．研究の方法

(1)研究目標１：学童期にある発達障害をもつ子どもその家族ストレングスを明らかにする。

調査期間：2020 年 11 月～2021 年 11 月

研究協力者：以下、①～③の基準を満たす家族員とした。①学童期にあり発達障害の診断をうけている子どもの家族員、②発達障害をもつ子どもと共に生活している家族員、③家族らしさを大切にして家族の中や地域と交流を図り、体験をとおして考え方を調整しつつ生活している家族員

研究協力者へのアクセス：A 県のペアレントメンターの活動を行う法人の管理者に文書と口頭で研究協力の同意を得た後、管理者に家族ストレングスが高いと捉える発達障害をもつ学童期の子どもの家族の紹介を依頼した。研究協力候補者に文書と口頭で研究の主旨、研究方法等を説明し、同意を得て研究協力者とした。

データ収集：家族ストレングスの獲得過程、どのように家族ストレングスを活かしているかについて半構造的面接を行った。実施に際し、所属機関の研究倫理委員会の承認を得た。

分析方法：インタビューデータの逐語録を繰り返し読み、家族ストレングスを表している部分をコード化し、意味内容の類似性によりカテゴリ化した。

(2)研究目標２：学童期の発達障害をもつ子どもとその家族のストレングスを高める看護援助行動を明らかにする。

調査期間：2022 年 3～6 月。

研究協力者：学童期の発達障害をもつ子どもとその家族への支援経験 5 年以上の看護職

研究協力者へのアクセス：小学校の養護教諭、訪問看護師の所属する施設の管理者に文書または口頭で研究協力の同意を得た後、研究協力者に文書と口頭で研究の主旨、研究方法等を説明し、

同意を得て研究協力者とした。
データ収集方法：家族のストレングスを高める看護援助行動について半構造的面接を行った。家族のストレングスは、家族の存在意義を拠り所に、家族内外の交流から原動力を得て家族の目指す姿に向けて考え方を調整していく過程で獲得される家族の資質と定義した。インタビューデータの逐語録を繰り返し読み、家族のストレングスを高める援助行動を表している部分をコード化し、意味内容の類似性によりカテゴリー化した。実施に際し、所属機関の研究倫理委員会の承認を得た。

４．研究成果
(1)研究目標１：学童期にある発達障害児の家族の家族ストレングスを明らかにする
研究協力者は 7 名（母親 6 名、祖母 1 名)、計 6 組の家族で、うち 1 組は祖父母と同世帯、5 組は核家族世帯であった。分析の結果、家族ストレングスとして【関心を向け合い醸成される家族のまとまりをもつ】【今の気持ちを認めて家族内の緊張を緩めている】【傍で刺激して潜在的な能力を引き出している】【周囲と接点を重ねて特性への理解の輪をつないでいる】【得意なことで能力を発揮できる道に見通しを立てている】の５つのカテゴリーと 20 のサブカテゴリーが抽出された。
　学童期にある発達障害をもつ子どもとその家族のストレングスとして、家族を拠り所として子どもが集団生活の場に馴染むことを助力していると考えらえた。学童期の発達障害をもつ子どもは集団生活に適応する過程において自己肯定感が低下しやすいことが課題とされており、本研究において、日々の学校生活の中で生じる子どもにとってのストレスを察知して、子どもの【今の気持ちを認めて家族内の緊張を緩めている】。そして、家族内で【関心を向け合い醸成される家族のまとまりをもつ】ことで、家族は子どもの心の拠り所となり、【傍で刺激して潜在的な能力を引き出して（いる）】、子どもの情緒的安定、自信をもたらしていると考えられる。また、地域社会との間では、【周囲と接点を重ねて特性への理解の輪をつないでい（る）】くことで、周囲との軋轢を避けつつ子どもが集団に馴染み、生活の場を拡げていく中で、子どもが【得意なことで能力を発揮できる道に見通しを立てている】と考えられる。

(2)研究目標２：学童期の発達障害をもつ子どもとその家族のストレングスを高める看護援助行動を明らかにする。
研究協力者は 5 名で、看護師 3 名、看護師の資格を有する養護教諭 2 名であった。分析の結果、【親の話を聴くことに徹して傍に在り続ける】【繋がりが拡がるように家族と周囲の橋渡しをする】【独自性を守りながら子どものペースに応じた成長を促す】【親子の意向を汲んだ集団生活の適応を支える】【支援チームの連携を強化して子どもに居心地のよい環境を整える】【備わっている力を活用して家族の主体的な行動を助力する】の 6 つのカテゴリーと 26 のサブカテゴリーが明らかとなった。
　学童期にある発達障害をもつ子どもとその家族のストレングスを高める看護援助行動として、発達障害は認識と関係（社会性）の発達のおくれを特徴とし、学童期は、親子関係を安定させながら子どもに適した学習環境と友人や教師など人間関係を拡げることが課題となる。このような発達障害、学童期の特徴を踏まえて、支援者は【親の話を聴くことに徹して傍に在り続け（る）】て、親が捉える子どもの性格的特徴、障害の特性を考慮し【親子の意向を汲んだ集団生活の適応を支える】親との協働関係を構築していると考えられる。さらに、日頃、身近に接している子どもには、無理のない範囲を見極めて【支援チームの連携を強化して子どもに居心地のよい環境を整え（る）】、【支援チームの連携を強化して子どもに居心地のよい環境を整える】ことを通じて【独自性を守りながら子どものペースに応じた成長を促（す）】していると考えられる。地域との交流の活性化に向けた援助行動として、【繋がりが拡がるように家族と周囲の橋渡しを（する）】して、他の親、友人など周囲からの誤解によって子どもと家族が地域から孤立しないように、発達障害への理解と家族が周囲と円滑な関係を築けるように支援していると考えられる。

(3)今後の課題
　本研究の目的は、学童期にある発達障害児とその家族の家族ストレングスを促進するケアプログラムの開発をすることである。
　研究目標１，２で明らかになった学童期にある発達障害をもつ子どもその家族ストレングス、学童期の発達障害をもつ子どもとその家族のストレングスを高める看護援助行動の知見を活用するとともに、文献検討を含めて、学童期にある発達障害をもつ子どもの家族の家族ストレングスを促進するケアプログラム案を作成、洗練化することが課題である。家族ストレングスでは、家族員個人がもつストレングスと家族として獲得された家族ストレングスがあり、家族システムとしての特徴を踏まえてケアプログラムに反映させていく必要がある。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 源田美香
２．発表標題 学童期にある発達障がいをもつ子どもとその家族の家族ストレングス
３．学会等名 第30回日本家族看護学会学術集会
４．発表年 2023年

１．発表者名 源田美香
２．発表標題 学童期にある発達障がいをもつ子どもとその家族の家族ストレングスを高める援助行動
３．学会等名 第32回日本家族看護学会学術集会
４．発表年 2025年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

―

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	長戸　和子 (Nagato Kazuko) (30210107)	高知県立大学・看護学部・教授 (26401)	
研究分担者	杉原　俊二 (Sugihara Syunji) (50259644)	高知県立大学・社会福祉学部・教授 (26401)	

6．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	藤代　知美 (Fujishiro Tomomi) (60282464)	高知県立大学・看護学部・准教授 (26401)	
研究分担者	有田　直子 (Arita Naoko) (70294238)	高知県立大学・看護学部・講師 (26401)	
研究分担者	中井　美喜子 (Nakai Mikiko) (80827634)	高知県立大学・看護学部・助教 (26401)	

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関